

學問のすゝめ

福澤 諭吉

同著

小幡篤次郎

一天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへりされば天より人を生するには万人は万人皆同じ位にして生れながら貴賤上下の差別なく万物の靈たる身と心との働を以て天地の間にあるよろづの者を資り以て衣食住の用を達し自由自在互に人の妨げをなさずして各安樂に此世を渡らしめ給ふの趣意なりされども今広く此人間世界を見渡すにかしこき人ありおろかなる人あり貧しきもあり富めるもあり貴人もあり下人もありて其有様雲と坭との相違あるに似たるは何ぞや其次第甚明なり実語教に人学ばざれば智なし智なき者は愚人なりとありされば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとに由て出来るものなり又世の中にむつかしき仕事もありやすき仕事もあり其むつかしき仕事をする者を身分

重き人と名づけやすき仕事をする者を身分軽き人といふ都て心を用ひ心配する仕事はむつかしくして手足を用ひる力役はやすし故に医者学者政府の役人又は大なる商売をする町人夥多の奉公人を召使ふ大百姓などは身分重くして貴き者といふべし身分重くして貴ければ自から其家も富て下々の者より見れば及ふべからざるやうなれども其本を尋れば唯其人に学問の力あるとなきとに由て其相違も出来たるのみにて天より定たる約束にあらず諺に云く天は富貴を人に与へずしてこれを其人の働に与るものなりとされば前にも云へる通り人は生れながらにして貴賤貧富の別なし唯学問を勤て物事をよく知る者は貴人となり富人となり無学なる者は貧人となり下人となるなり

一学問とは唯むつかしき字を知り解し難き古文を読み和歌を楽み詩を作るなど世上に実のなき文学をいふにあらずこれ等の文学も自から人の心を悦ばしめ随分調法なるものなれども古来世間の儒者和学者などの申すやうさまであがめ貴むべきものにあらず古来漢学者に世帯持の上手なる者も少く和歌をよくして商売に巧者なる町人も稀なりこれがため心ある町人百姓は其子の学問に出精するを見てやがて身代を持崩すならんとて親心に心配する者あり無理ならぬことなり畢竟其学問の実に遠くして日用の間に合わぬ証拠なりされは今斯る実なき学問は先づ次にし専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり譬へ

はいろは四十七文字を習ひ手紙の文言帳合の仕方算盤の稽古天秤の取扱等を心得尚又進で学ぶべき箇条は甚多し地理学とは日本国中は勿論世界万国の風土道案内なり究理学とは天地万物の性質を見て其働を知る学問なり歴史とは年代記のくわしき者にて万国古今の有様を詮索する書物なり経済学とは一身一家の世帯より天下の世帯を説きたるものなり修身学とは身の行を修め人に交わり此世を渡るべき天然の道理を述たるものなり是等の学問をするに何れも西洋の翻訳書を取調べ大抵の事は日本の仮名にて用を便し或は年少にして文才ある者へは横文字をも読ませ一科一学も実事を押へ其事に就き其物に従ひ近く物事の道理を求て今日の用を達すべきなり右は人間普通の実学にて人たる者は貴賤上下の区別なく皆悉くたしなむべき心得なれば此心得ありて後に士農工商各其分を尽し銘々の家業を営み身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり

一学問するには分限を知る事肝要なり人の天然生れ附は繫かれず縛られず一人前の男は男一人前の女は女にて自由自在なる者なれども唯自由自在とのみ唱へて分限を知らざれば我俥放盪に陥ること多し即ち其分限とは天の道理に基き人の情に従ひ他人の妨げを為さずして我一身の自由を達することなり自由と我俥との界は他人の妨を為すと為さざるとの間にあり譬へは自分の金銀を費やして為すことなれば假令ひ酒色に耽り放盪を尽すも

自由自在なるべきに似たれども決して然らず一人の放盪は諸人の手本となり遂に世間の風俗を乱りて人の教に妨を為すがゆゑに其費す所の金銀は其人のものたりとも其罪許すべからず又自由独立の事は人の一身に在るのみならず一国の上にもあることなり我日本は亜細亞洲の東に離れたる一個の島国にて古来外国と交を結ばず独り自国の産物のみを衣食して不足と思ひしこともなかりしが嘉永年中アメリカ人渡来せしより外国交易のこと始まり今日の有様に及びしことにて開港の後も色々と議論多く鎖国攘夷などゝやかましくいひし者もありしかども其見る所甚た狭く諺にいふ井の底の蛙にて其議論取るに足らず日本とても西洋諸国とても同じ天地の間において同じ日輪に照らされ同じ月を眺め海を共にし空気を共にし情合相同じき人民なればこゝに余るものは彼に渡し彼に余るものは我に取り互に相教へ互に相学び耻ることもなく誇ることもなく互に便利を達し互に其幸を祈り天理人道に従て互の交を結び理のためにはアフリカの黒奴にも恐入り道のためには英吉利亜米利加の軍艦をも恐れず国の耻辱とありては日本国中の人民一人も残らず命を棄てゝ国の威光を落さゞるこそ一国の自由独立と申すべきなり然るを支那人などの如く我国より外に国なき如く外国の人を見ればひとくちに夷狄々々と唱へ四足にてあるく畜類のやうにこれを賤しめ是を嫌らひ自国の力をも計らずして妄に外国人を追払は

んとし却て其夷狄に窘めらるゝなどの始末は実に国の分限を知らず一人の身の上にて云へば天然の自由を達せずして我侂放蕩に陥る者といふべし王制一度新なりしより以来我日本の政風大に改り外は万国の公法を以て外国に交り内は人民に自由独立の趣旨を示し既に平民へ苗字乗馬を許せしが如きは開闢以来の一美事士農工商四民の位を一様にするの基こゝに定まりたりと言うべきなりされば今より後は日本国中の人民に生れながら其身に附たる位などゝ申すは先づなき姿にて唯其人の才徳と其居処とに由て位もあるものなり譬へば政府の官吏を粗略にせざるは当然のことなれどもこは其人の身の貴きにあらず其人の才徳を以て其役義を勧め国民のために貴き国法を取扱ふがゆへに是を貴ぶのみ人の貴きにあらず国法の貴きなり旧幕府の時代東海道に御茶壺の通行せしは皆人の知る所なり其外御用の鷹は人よりも貴く御用の馬には往来の旅人も路を避る等都て御用の二字を附れば石にても瓦にても恐ろしく貴きもののやうに見へ世の中の人も数千百年の古より是を嫌ひながら又自然に其仕来に慣れ上下互に見苦しき風俗を成せしことなれども畢竟是等は皆法の貴きにもあらず品物の貴きにもあらず唯徒に政府の威光を張り人を畏して人の自由を妨げんとする卑怯なる仕方にて実なき虚威といふものなり今日にいたりては最早全日本国内に斯る浅ましき制度風俗は絶へてなき筈なれば人々安心いたしかり

そめにも政府に対して不平を抱くことあらばこれを包みかくして暗に上を怨むることなく其路を求め其筋に由り静に是を訴て遠慮なく議論すべし天理人情にさへ叶ふ事ならば一命をも抛て争ふべきなり是即ち一国人民たる者の分限と申すものなり

一前条に言へる通り人の一身も一国も天の道理に基て不羈自由なるものなれば若し此一国の自由を妨げんとする者あらば世界万国を敵とするも恐るゝに足らず此一身の自由を妨げんとする者あらば政府の官吏も憚るに足らずましてこのごろは四民同等の基本も立ちしことなれば何れも安心いたし唯天理に従て存分に事を為すべしとは申ながら凡そ人たる者はそれぞれの身分あれば亦其身分に従ひ相応の才徳なかるべからず身に才徳を備んとするには物事の理を知らざるべからず物事の理を知らんとするには字を学ばざるべからず是即ち学問の急務なる訳なり昨今の有様を見るに農工商の三民は其身分以前に百倍しやがて士族と肩を並るの勢に至り今日にても三民の内に人物あれば政府の上に採用せらるべき道既に開けたることなればよく其身分を顧み我身分を重きものと思ひ卑劣の所行あるべからず凡そ世の中に無知文盲の民ほど憐むべく又悪むべきものはあらず智恵なきの極は耻を知らざるに至り己が無智を以て貧究に陥り飢寒に迫るときは己が身を罪せずして妄に傍の富る人を怨み甚しきは徒党を結び強訴一揆などゝて乱妨に及ぶことあり

耻を知らざるとやいわん法を恐れずとやいわん天下の法度を頼みて其身の安全を保ち其家の渡世をいたしながら其頼む所のみを頼て己が私欲の為には又これを破る前後不都合の次第ならずや或はたまゝ身本儘にして相応の身代ある者も金銭を貯ることを知りて子孫を教ることを知らず教へざる子孫なれば其愚なるも又怪むに足らず遂には遊惰放蕩に流れ先祖の家督をも一朝の煙と為す者少からず斯る愚民を支配するには逆も道理を以て論すべき方便なければ唯威を以て畏すのみ西洋の諺に愚民の上に苛き政府ありとはこの事なりこは政府の苛きにあらず愚民の自から招く災なり愚民の上に苛き政府あれば良民の上には良き政府あるの理なり故に今我日本国におゐても此人民ありて此政府あるなり仮に人民の徳義今日よりも衰へて尚無学文盲に沈むことあらば政府の法も今一段嚴重になるべく若し又人民皆学問に志して物事の理を知り文明の風に赴くことあらば政府の法も尚又寛仁大度の場合に及ふべし法の苛きと寛やかなるとは唯人民の徳不徳に由て自から加減あるのみ人誰か苛政を好て良政を悪む者あらん誰か本国の富強を祈らざる者あらん誰か外国の悔を甘んずる者あらん是即ち人たる者の常の情なり今の世に生れ報国の心あらん者は必ずしも身を苦しめ思を焦すほどの心配あるにあらず唯其大切なる目当てはこの人情に基きて先づ一身の行を正しく厚く学に志し博く事を知り銘々の身分に相応

すべきほどの智徳を備へて政府は其政を施すに易く諸民は其支配を受て苦みなきやう互に其所を得て共に全国の大平を護らんとするの一事のみ今余輩の勸る学問も専らこの一事を以て趣旨とせり

學問のすゝめ終

端書

此度余輩の故郷中津に学校を開くに付学問の趣意を記して旧く交りたる同郷の朋友へ示

さんがため一冊を綴りしかば或人これを見て云くこの冊子を独り中津の人へのみ示さんより広く世間に布告せば其益も又広がるべしとの勸に由り乃ち慶応義塾の活字版を以てこれを摺り同志の一覽に供ふるなり

明治四年

福澤 諭吉

記

未十二月

小幡篤次郎

■このファイルについて

標題：学問のすゝめ

著者：福澤諭吉

本文：「學問のすゝめ」

明治五年二月〈BR〉

慶應義塾出版局刊〈BR〉

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和47年4月10日 発行〈BR〉

(第5刷) 〈BR〉

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等と思われる箇所は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○いわゆる「変体かな」は、現行の「かな」にかえました。〈BR〉

○旧字体は、現行の新字体にかえました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：里実文庫 2006年1月8日